

福島県北部方言の平叙文・疑問文と
文末イントネーション

白 岩 広 行

立正大学文学部研究紀要第40号抜刷
令和 6 年 3 月 29 日 発 行

福島県北部方言の平叙文・疑問文と 文末イントネーション

白 岩 広 行

1. はじめに

東京方言では、「ビール飲む」のように終助詞の生起しない文は、文末イントネーションが「飲む↘」のように下降調なら平叙文、「飲む↗」のように上昇調なら疑問文と解釈されるのが基本のようである。終助詞が生起する場合は、下降調の「飲むよ↘」も上昇調の「飲むよ↗」も平叙文であるように、終助詞の意味が文のタイプに関わる。しかし、終助詞が生起しない場合は、下降調が平叙文、上昇調が疑問文という形で、文末イントネーションが文のタイプを左右するように感じられる。

一方、福島市を中心とする福島県北部の方言では、東京方言と同じく、基本的には平叙文が下降調、疑問文が上昇調になるが、必ずしも文末イントネーションが文のタイプを決めるわけではない。つまり、上昇調が平叙文¹で使われることがある。

- (1) (ビールの缶を手にした父親から一緒に飲むか尋ねられ、息子がそれに答えて) うん、
{飲む↘／飲む↗}

場合によっては、疑問文が下降調になることもある。

- (2) (東京に住む息子が実家の母親に電話で尋ねて) そっちは {変わらない↘／変
わない↗}

本稿の7.3節でふれるとおり(2)のように疑問の意味を持つ文が下降調になることは東京方言にもあるようだが、(1)のような平叙文が上昇調になることは東京方言にはあまりないように感じられる。

本稿では東京方言との対照には立ち入らないが、このような例があることを考えると、福島県北部方言の記述に関わる問題として、平叙文か疑問文かという文のタイプの違いが、下降調か上昇調かという文末イントネーションの違いとどう関わっているかを整理して捉える必要があるといえる。そこで、本稿では、福島県北部方言の平叙文と疑問文がどのような場合にどのような文末イントネーションをとるのかについて記述する。

本稿で「福島県北部方言」と呼ぶのは、菅野（1982）が「信達方言」と呼ぶ福島市、伊達市、伊達郡の方言である。「信達」という地域呼称が一般的でないため、飯豊（1974）を参考にこの方言を「福島県北部方言」と呼ぶ。

本稿でデータとして示す例文は、すべて福島県北部方言を母語とする筆者による作例である。筆者は1982年に福島県保原町（現在の伊達市）に生まれた男性で、両親とも保原町出身である。18歳までは福島県内で生育し、その後は県外で暮らしている²。確実な記述のためにはより多くの話者からデータを得る必要があるが、イントネーションについては内省に慣れた話者でなければ明確なデータが得られないことが多く、まずは筆者自身の内省を整理する必要があると考えた。作例にあたっては、方言を使用する典型的な場面として、主に家庭内の会話を想定した。文字に書いて認識できるような言語形式と違って、イントネーションは方言コードと標準語コードでの意識的な切り替えが難しく、典型的な方言使用の場面でないと内省に標準語的な要素が混じりかねないと考えたためである。例文として示す親と息子の会話については、息子も大人であることを想定している。

福島県北部方言の例文の表記は、白岩（2018）で示した漢字かなまじりの表記法による³。標準語訳が必要な箇所については《 》のカッコで標準語訳を示す。漢字かなまじりの表記法は簡便だが文法面の詳細な情報を含まないため、その補足として本稿の末尾に各例文の音素表記、グロス、標準語訳を示した。福島県北部方言の文法の概略については白岩（2017）も参照されたい。ただし、白岩（2017）が高年層の伝統的な体系の記述を目指したのに対し、本稿の例文は中年層話者の筆者が内省したものであるため、いわゆるズーズー弁の特徴が見られない点などで違いがある。

文末イントネーションについて、下降調は↘、上昇調は↗、3節でふれる上昇下降調は↗↘の記号で示す。句点「。」およびクエスチョンマーク「？」は例文で使わない。句点「。」は文末イントネーションが下降調の平叙文、クエスチョンマーク「？」は文末イントネーションが上昇調の疑問文を想起させやすい。本稿では上昇調の平叙文、下降調の疑問文も扱っており、それらの文は句点「。」やクエスチョンマーク「？」で示せないと考えた。ただし、本稿末尾の標準語訳では平叙文の文末を句点「。」、疑問文の文末をクエスチョンマーク「？」で示した。

例文中の#の記号は、その文末イントネーションの使用が文脈にあわないことを示す。?の記号は、その文末イントネーションの使用に不自然さを感じることを示す。

本稿では、文のタイプとして平叙文と疑問文、文末イントネーションとして下降調と上昇調を記述の対象とする。命令文など他のタイプの文、あるいは、上昇下降調などの他のパターン

の文末イントネーションについては、3節で簡単にふれるものの、記述の対象にはしない。また、終助詞の生じた文も、終助詞の意味とあわせて記述する必要があるため、本稿の記述の対象とはしない。ただし、疑問の助詞「か」が生じた文は対象とする。「か」は「どこかわかんねえ《わからない》」のように文末に生起するとは限らず、終助詞と見なせないためである。

2. 先行研究：日本語諸方言の疑問文の文末イントネーション

日本語諸方言の疑問文の文末イントネーションについては、木部（2010, 2013, 2019）が類型化の試みをおこなっている。木部によると、東京方言では疑問文が上昇調の文末イントネーションをとるのが普通だが、方言によっては疑問文が下降調の文末イントネーションをとることもある。木部（2019）は、疑問文の文末イントネーションという点から、日本語の諸方言を「上昇調タイプ」「下降調タイプ」「相補タイプ」「漸上昇タイプ」の4つに類型化している。

「上昇調タイプ」は疑問文の文末が普通上昇調になるタイプで、東京方言がこれにあたる。東京方言では、詰問的な意味の加わった疑問詞疑問文の場合を除き、疑問文は上昇調の文末イントネーションをとる。「下降調タイプ」は疑問文の文末が普通下降調になるタイプで、鹿児島市方言や青森県弘前市方言がこれにあたる。下降調でなく上昇調になると強い応答要求などの意味が加わった質問になる。「相補タイプ」は疑問詞や疑問を表す助詞「か」「の」が生じた疑問文は下降調、生起しない疑問文は上昇調になるタイプで、長野県松本市方言、愛知県一宮市木曾川町方言、広島市方言、福岡県北九州市方言がこれにあたる。相補タイプの方言では、文が疑問文であることの標示は、疑問詞や助詞「か」「の」という語形式と文末イントネーションの双方が互いに補いあうような形でおこなわれる。「漸上昇調タイプ」は、疑問詞疑問文において疑問詞から文末までのイントネーションが緩やかに上昇するタイプで、福岡方言がこれにあたる。疑問詞がない疑問文の文末イントネーションは文末助詞の種類によって東京方言（上昇調タイプ）や鹿児島方言（下降調タイプ）に準じる。

本稿の対象とする福島県北部方言は、疑問文の文末イントネーションが基本的に上昇調になるタイプで、木部の示す4類型のうち「上昇調タイプ」にあたる。つまり、同じ東北地方の青森県弘前市方言ではなく東京方言と同じタイプである。ただし、1節で示したとおり、平叙文が上昇調になることもあるため、上昇調のイントネーションが必ずしも疑問の意味を表すとはいえない。また、疑問文が下降調になることもあって、それがどのような場合か記述する必要

がある。本稿では、福島県北部方言の疑問文を基本的には東京方言と同じ「上昇調タイプ」と捉えつつ、平叙文でも上昇調になったり、疑問文でも下降調になったりする場合を含めて記述し、平叙文と疑問文における文末イントネーションのあらわれかたを整理する。

なお、五十嵐（2021）は、海外の研究事例をもとに、通言語的な（世界の諸言語に通じる一般的な）傾向として、真偽疑問文は上昇調になりやすく、疑問詞疑問文は真偽疑問文に比べて上昇調になりにくいこと、真偽疑問文と疑問詞疑問文の両方が非上昇調⁴になる言語は少数派であることを示している。そのうえで、通言語的に珍しく鹿児島市や青森県弘前市など日本列島の周辺部に離れて分布する「下降調タイプ」のような体系は古いもので、それが通言語的によくあるものに変化して生じたのが列島の中央部に分布する「相補タイプ」「上昇調タイプ」のような体系であるという仮説を示した。この仮説に立てば、「上昇調タイプ」に属する福島県北部方言は、比較的に新しい体系を持つ方言ということになる。ただし、地理的には列島中央部からやや離れているため、東京方言に比べれば古い体系を持っている可能性もある。本稿はそのような歴史的变化の視点には立ち入らないが、五十嵐（2021）の仮説は興味深い。

3. 福島県北部方言の文末イントネーションの概観

ここでは、福島県北部方言にはどのような文末イントネーションのパターンがあるか、その全体像を概観する。白岩（2011a, 2014）は、終助詞の生起しない文を対象に、福島県北部方言の文末イントネーションを下降調、上昇調、上昇下降調の3つのパターンに分類し、その基本的意味を次のように記述している⁵。

（3） 下降調の基本的特徴

話し手が、当該の発話に関して聞き手の持つ情報量や意見を顧慮していないことを示す（独話を含む）。

（4） 上昇調の基本的特徴

話し手が、当該の発話に関する情報量や意見について、話し手と聞き手の間に差があることを見込んでいることを示す。

（5） 上昇下降調の基本的特徴

話し手が、当該の発話に関する情報量や意見について、話し手と聞き手の間に差がないことを見込んでいることを示す（実際には差がある場面でも、本来は差がなくて当然と見なしている）。

それぞれに関する具体的な記述は白岩（2011a, 2014）を参照されたい。以下、本稿の記述に関わる内容を簡単にまとめる。

それぞれのパターンの音声的な特徴を示すと図1のようになる。下降調とは文末のイントネーションが下降するもので、大きな下降のほか、いわゆる自然下降のような緩やかな下降を含む。上昇調は上昇するもの、上昇下降調は上昇した後に下降するものである。郡（2015, 2020）は東京方言の文末イントネーションを音韻的な面から4つに分類しているが、本稿のいう福島県北部方言の「下降調」「上昇調」「上昇下降調」は、郡の示す東京方言の文末イントネーションのうち、それぞれ「無音調⁶」「疑問型上昇調（連続的上昇）」「上昇下降調」に相当する。郡はこのほかに「強調型上昇調（段状上昇）」という文末イントネーションを東京方言に認めているが、筆者の内省する限り、強調型上昇調にあたる文末イントネーションは、福島県北部方言では終助詞「な」の生起した文には見られるものの、終助詞の生起しない文には見られない。

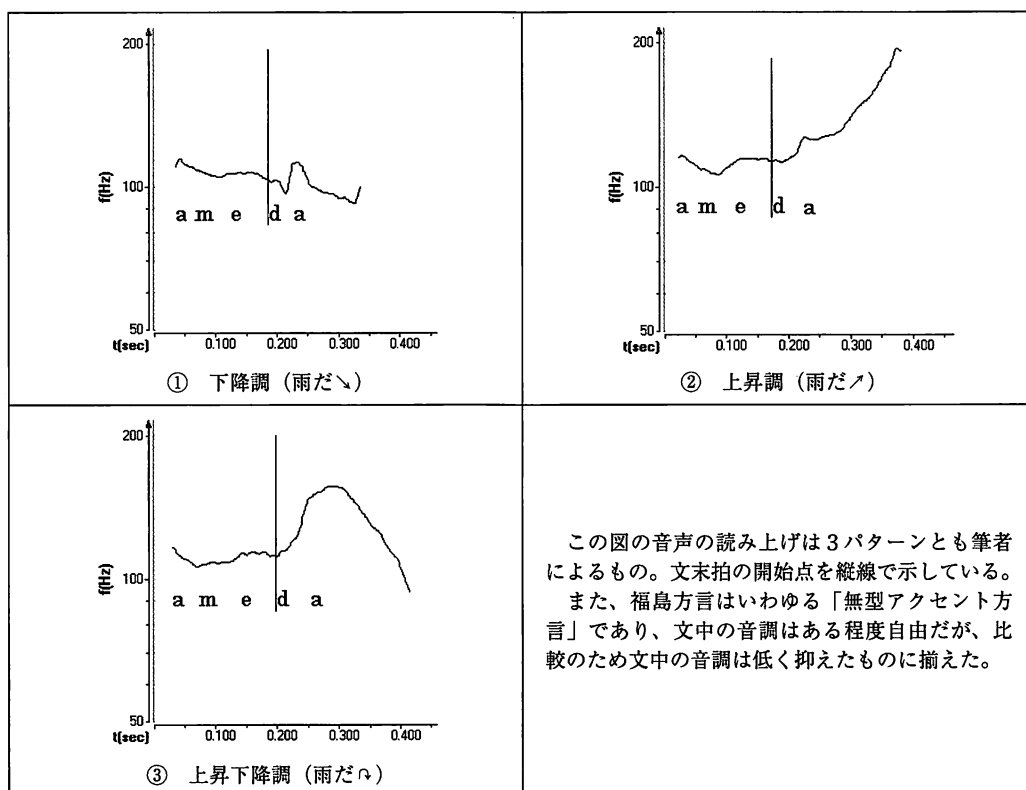


図1 下降調・上昇調・上昇下降調による「雨だ」の発音例（白岩 2011a: 92）

次に、意味的な特徴について、文が下降調、上昇調、上昇下降調になる典型的な文脈を挙げて説明する⁷。

(6) (AとBは二人で部屋の中にいる)

A : (Bに尋ねて) 外、雨か↗

B : (カーテンを開けて雨が降っているのに気づき) うん、[雨だ↘ / # 雨だ↗ / # 雨だ↘]

(7) (Aは部屋の中。Bは外から帰ってきたが、濡れてはいない)

A : (Bに尋ねて) 外、雨か↗

B : (相手に教えるように) うん、[# 雨だ↘ / 雨だ↗ / # 雨だ↘]

(8) (Aは部屋の中。Bは外からびしょ濡れになって帰ってきた)

A : (Bに尋ねて) 外、雨か↗

B : (この姿を見てなぜわからないのかという態度で) うん、[# 雨だ↘ / # 雨だ↗ / 雨だ↘] 俺がこだに《こんなに》びしょ濡れなの見たらわかって《わかるだろうが》↘

(6)～(8)のBの発話はいずれも外が雨かと尋ねられて「雨だ」と答える平叙文だが、その文末イントネーションは文脈によって異なる。Bの答えが下降調になる典型的な文脈は雨が降っているのに気づいて発話する(6B)のような場合、聞き手の持つ情報を顧慮せずその場で認識したことをそのまま口にする場合である。(6B)のようにその場で気づいた場合以外でも、いちいち聞き手の持つ情報量を顧慮しないで一方的に情報を提示する場合には下降調になる。上昇調は(7B)のように聞き手より話し手自身の情報量が多いことを見込んで、自分の知っていることを聞き手に知らせようとする態度を示す場合に使われる。上昇下降調は(8B)のように聞き手との間に情報量の差がないことを見込んで、聞き手にもわかって当然だという態度を示す場合に使われる。

また、(6)～(8)のAの発話のように、疑問文では基本的に上昇調が使われる。疑問文の場合には、話し手より聞き手の情報量が多いことを見込んで、話し手自身の知らないことについて聞き手から教えてもらおうとする態度が示される。

これらのことから、白岩(2011a, 2014)は、上記の(3)～(5)のような基本的意味を持つものとしてそれぞれの文末イントネーションを捉えている。上昇調については、(7B)のような平叙文では話し手のほうが情報量が多いこと、(6A)～(8A)のような疑問文では聞き手のほうが情報量が多いことを見込んでいることになる。本稿では、このような基本的意味

をふまえつつ、下降調と上昇調が平叙文と疑問文でどのようにあらわれるかについて、より具体的に記述する。

なお、上昇下降調は本稿の記述の対象外とする。上昇下降調は、白岩（2011a, 2014）が示すように疑問文としては反語の場合にしか使われない。反語の文は、疑問詞ないし助詞「か」が生起するため形の面では疑問文にあたるが、意味的には典型的な疑問を表すとはいえない。つまり、上昇下降調の文は反語でない限り平叙文にしかあられず、平叙文か疑問文かという文のタイプの違いには関わらない。上昇下降調の詳しい特徴については白岩（2009）を参照されたい。

また、これも白岩（2011a, 2014）が示すように、下降調、上昇調、上昇下降調は、いずれも命令文や依頼文など、平叙文と疑問文以外のタイプの文でもあらわれる。しかし、本稿では平叙文と疑問文の違いを問題とするため、それ以外のタイプの文は対象としない。命令文や依頼文は聞き手の行動を要求する文であり、情報のやりとりに関わる平叙文、疑問文とは区別して記述する必要があるだろう。

4. 記述の枠組み

ここからは、平叙文か疑問文かという文のタイプの違いと下降調か上昇調かという文末イントネーションの違いがどう関わっているかについて記述を進める。本節では、その記述の枠組みをあらかじめ簡単に示しておく。

次の5節では、まず、文末イントネーション以外に平叙文と疑問文を区別する手がかりがない文を対象に、下降調はその文が平叙文であること、上昇調はその文が疑問文であることを表すということについて述べる。そのうえで、6節では、文末イントネーション以外の要素から平叙文であることが自明な文について記述する。具体的には、文末が「だ」で終わる文、相手の問いかけに対する応答の文脈で発する文がこれにあたる。これらの文では、平叙文であっても上昇調が使われることがある。7節では、文末イントネーション以外の要素から疑問文であることが自明な文について記述する。具体的には、疑問詞が生起する文、文末が疑問の助詞「か」で終わる文、文脈から疑問文と解釈される文がこれにあたる。これらの文では、疑問文であっても下降調になることがある。ただし、下降調という文末イントネーション自体が疑問の意味を表すわけではない。

このような枠組みで記述を進めることにより、基本的には文末イントネーションが平叙文と

疑問文の区別に関わることを示しつつ、文末イントネーション以外の要素から平叙文か疑問文かの区別が自明な文では、平叙文であっても上昇調、疑問文であっても下降調になることがあるという点について、具体的なことを整理する。

なお、本稿では、文のタイプを意味的な面から捉え、文脈から読みとれる意味を含め、疑問の意味を持たない文を平叙文、疑問の意味を持つ文を疑問文と見なす。形式的な面を基準にすると、文末イントネーションがその形式面に含まれることになり、平叙文、疑問文の定義自体に文末イントネーションが関わってしまうためである。ただし、文のタイプについては意味面だけでなく形式面も基準に整理する必要がある、命令文や依頼文などの他のタイプの文を含めて、本稿とは別の機会に論じねばならないことを付記しておきたい。特に、文末イントネーションが下降調で文脈からしか疑問の意味が読みとれない文は典型的な疑問文とはいえ、位置づけを検討する必要がある。このことについては7.3節で述べる。

5. 文末イントネーション以外に平叙文と疑問文を区別する手がかりがない文

まずは、文末イントネーション以外に平叙文と疑問文を区別する手がかりがない文について示す。

6節と7節で示すように、文末が「だ」ないし「か」で終わる文、あるいは疑問詞が生じた文については、そのことによって平叙文か疑問文かの区別ができる。また、文脈から平叙文か疑問文かの区別が明らかな文もある。しかし、特別な文脈がない状況でふと発話したときなど、それらに該当しない場合、(9)のように平叙文では下降調、(10)のように疑問文では上昇調があらわれる。

(9) (晩ごはんを食べたあと、家族でテレビを見ている。父親がふと口を開いて)

{眠い↘/# 眠い↑} だんだん《そろそろ》{寝る↘/# 寝る↑}

(と言って、寝室に向かう。)

(10) (晩ごはんを食べたあと、家族でテレビを見ている。父親の眠そうな顔を見た息子が

父親にふと尋ねて) {# 眠い↘/眠い↑} だんだん《そろそろ》{# 寝る↘/寝る↑}

文末イントネーション以外に平叙文と疑問文を区別する手がかりがない場合、下降調はその文が平叙文であることを、上昇調は疑問文であることを表すといえる。

なお、ここでは動詞「寝る」と形容詞「眠い」の例を挙げたが、述語が名詞や形容動詞でコピュラ「だ」の生起しうる場合、文末が「だ」で終わるかどうかが問題になる。これについて

は、次の6節で述べる。

6. 文末イントネーション以外の要素から平叙文であることが自明な文

6.1 文末が「だ」で終わる文

文に疑問詞が生じた場合と問い返しの場合を除けば⁸、文末がコピュラの非過去形「だ」で終わる文は平叙文であり、疑問文になることはない。

- (11) (応募した懸賞の結果を見た息子に母親が尋ねて) {当選↗ / # 当選だ↗ / 当選だった↗}

例えば(11)は応募した懸賞が当選だったかを母親が息子に尋ねる文で、文脈的に疑問文と解釈される(7.3節で示すとおり下降調にもなりうるが、ここでは典型的な疑問を表す上昇調の例を挙げる)。コピュラのつかない「当選」、コピュラが過去形になった「当選だった」は疑問の意味を持つが、コピュラの非過去形「だ」で終わる「当選だ」は疑問の意味を持ちえず、この文脈では使えない。このように、文末が「だ」で終わる文は疑問文にならない。

文末が「だ」で終わる文は、平叙文だが下降調になるとは限らず、上昇調にもなることがある。次の(12)は(11)で母親に尋ねられた息子が応答する平叙文の例である。

- (12) ((11)で母親に尋ねられた息子が答えて) {当選だ↘ / 当選だ↗}

この場合、下降調か上昇調かで文の意味合いは異なる。3節で示した基本的特徴のとおり、下降調では特に聞き手の持つ情報量を顧慮せず自分の認識したことをそのまま口にするのに対し、上昇調では情報量の差を顧慮して自分の知っていることを聞き手に知らせようとする態度が示される。つまり、尋ねられてから当選通知を見直したり記憶を確かめたりして、その場であらためて頭の中に生じた認識を口にするような場合は下降調になる。尋ねられる前から当選であることを確かに認識していて、すでに頭の中にある認識を聞き手に知らせようとする場合は上昇調になる。

文末が「だ」で終わる文は平叙文であることが自明なので、上昇調になっても疑問文と解釈されることはなく、3節で示した基本的特徴をもとに、自分の知っていることを聞き手に知らせようとする態度が示されるのだといえる。

上の(12)は、次の6.2節で示すのと同じく相手の問いかけに応答するものであり、文脈的にも平叙文であることが自明な例であった。しかし、突然に新しい会話をはじめる場合など特別な文脈がない場合でも、文末が「だ」で終わる文は平叙文であることが自明であり、上昇

調になることがある。

(13) (母親と息子が2人で静かにお茶を飲んでいる。息子がふと口を開いて) 先週、近所
でお祭り {# あったんだ↘/あったんだ↑} そんなとき《そのとき》…

(13) は、近所の祭りを話題にして、新しい会話が始まる場合の例である。このようにノダ文で新しい会話をはじめる場合、文末が「だ」で終わることからその文が平叙文であることは自明であり、かつ、文末イントネーションは上昇調になる。上昇調を使うことで、自分の頭の中にある話題を聞き手に知らせようとする話し手の態度が示される。この文が下降調になると、お祭りがあったことをその場で思い出したような意味になり、新しい会話をはじめるという文脈にあわない⁹。

6.2 応答の文脈

相手の問いかけを受けて応答する文は文脈的に疑問の意味を持たず、その文が平叙文であることは自明である。この場合も、平叙文が上昇調になることがある。次の(14)は1節の(1)として挙げたもので、父親からの問いかけに息子が応答する例である。

(14) (ビールの缶を手にした父親から一緒に飲むか尋ねられ、息子がそれに答えて) うん、
{飲む↘/飲む↑}

(14) の文は下降調にも上昇調にもなるが、文の意味合いはそれぞれで異なる。尋ねられてから飲むことを決めたり、飲むつもりだったことを思い出したりして、その場で話し手の頭の中に浮かんだことを口にする場合は下降調になる。尋ねられる前から飲むことを決めていて、すでに話し手の頭にあったことを聞き手に知らせようとする場合は上昇調になる。

文末が「だ」で終わる文の場合と同様に、下降調では話し手はその場で生じた認識をそのまま口にするのに対し、上昇調ではすでに頭の中にある認識を聞き手に知らせようとする態度が示されるといえる。

7. 文末イントネーション以外の要素から疑問文であることが自明な文

7.1 疑問詞が生起する文

疑問詞はそれ自体が疑問の意味を持つ。主節に疑問詞が生起した文は疑問詞疑問文であり、平叙文になることはない。疑問詞疑問文は上昇調になるのが基本だが、下降調になることもある。

- (15) (父親と息子が茶の間で酒を飲んでいると、息子の酒が切れた。台所に行った父親がビールの缶と日本酒の小瓶を手に茶の間に戻り、息子に尋ねて) どっち {飲む↘/飲む↑}

(15) の例では、上昇調でも下降調でもどちらを飲むかを尋ねることに変わりはないが、上昇調のほうがより自然な疑問文と感じられる。上昇調だと、3節で示した基本的特徴に沿った形で、話し手より聞き手の情報量が多いことを見込み、自分の知らないことを聞き手から教えてもらおうとする態度が明確に示される。一方、下降調だと、聞き手のことを積極的に意識せず、自分の頭に浮かんだ疑問をそのままつぶやくような文になる。そのため、例えば、聞き手の反応を意識して使う「あのー」のような語が生起すると、下降調は不自然になる。

- (16) ((15)と同じ状況で父親がビールの缶と日本酒の小瓶を手に茶の間に戻ったが、息子はスマートフォンをいじっていてそれに気づいていない。父親が息子に尋ねて) あのー、どっち {? 飲む↘/飲む↑}

上昇調が疑問の態度を積極的に聞き手に示すのに対し、下降調の疑問詞疑問文は、あくまで疑問詞が疑問の意味を表しているだけで、下降調という文末イントネーションが疑問の意味を持つわけではないといえる。

なお、下降調の疑問詞疑問文は、聞き手のことを気かけないようなぶっきらぼうな印象の発話になる。そのため、家族などの親しい相手でなければ使いにくい。ただし、木部(2013, 2019)の述べる東京方言の場合と異なり、詰問というほど高圧的な印象を与えるわけではない。

7.2 文末が「か」で終わる文

「か」は疑問の意味を持つ助詞である。文末が「か」で終わる文は、「(雨が降ってきたのに気づいて) あ、雨か」「そういえば、今日は休みか」のようにその事実を知った、あるいは思い出した瞬間に発する気づきや思い出しの場合を除けば、真偽疑問文である¹⁰。次は文末が「か」で終わる真偽疑問文の例である。

- (17) (晩ごはんを食べたあと、家族でテレビを見ている。息子の眠そうな顔を見た父親が息子にふと尋ねて) {眠いか↘/眠いか↑} だんだん {寝っか↘/寝っか↑} 《そろそろ寝るか》

前の7.1節で示した疑問詞疑問文の場合と同様に、上昇調のほうがより自然に感じられ、自分の知らないことを聞き手から教えてもらおうとする態度が明確に示される。一方、下降調だと、自分の頭に浮かんだ疑問をそのままつぶやくような文になる。疑問詞疑問文の場合と同様

に、文末が「か」で終わる真偽疑問文の場合も、下降調の疑問詞疑問文は、あくまで「か」が疑問の意味を表しているだけで、下降調という文末イントネーションは疑問の意味を持たないと考えられる。

なお、文末が「か」で終わる真偽疑問文は、上昇調でも下降調でも、対話場面で使うとぞんざいな印象を与えるものであり、「あー」のように聞き手の反応をうかがうような語は生起しにくい。また、独話かかなり親しい対等・目下の相手への発話でしか使えない。そのなかでも、特に下降調の文は、疑問詞疑問文の場合と同様に、上昇調にくらべてぶっきらぼうな印象の発話になる。

7.3 文脈から疑問文と解釈される文

続けて、文脈からその文が疑問の意味を持つ場合について示す。(18)は5節の(10)の例に「お父さん」¹¹という主語を加えたもの、(19)は同じく(10)の例に父親があくびをしたという文脈を加えたものである。いずれも「眠い」「寝る」の主語は聞き手(父親)と解釈され、この文が疑問の意味を持つことは自明である。

(18) (晩ごはんを食べたあと、家族でテレビを見ている。父親の眠そうな顔を見た息子が父親に尋ねて) お父さん、{眠い↘/眠い↑} だんだん《そろそろ》{寝る↘/寝る↑}

(19) (晩ごはんを食べたあと、家族でテレビを見ている。父親があくびをしたので息子が父親に尋ねて) {眠い↘/眠い↑} だんだん《そろそろ》{寝る↘/寝る↑}

このように文脈から疑問文と解釈される文は、疑問詞が生起しているわけではないので、真偽疑問文ということになる。前の7.2節で示した文末が「か」で終わる真偽疑問文と異なるのは、特にぞんざいな印象を与えるのではなく、親のような目上の相手にも使えるということである。現実の日常会話では、何の文脈もなく疑問文が発されることは少なく、このように文脈からも疑問の意味が読みとれることが多いように考えられる。

文脈から疑問文であることが自明な場合も、ここまで示した場合と同様に、上昇調のほうが疑問文としてより自然で、自分の知らないことを聞き手から教えてもらおうとする態度が明確に示される。下降調だと、聞き手(父親)の「眠い」という状態や「寝る」という行動をその場で推測するだけで、聞き手に積極的に答えを求める態度は示されない。しかし、聞き手の目の前でその推測を提示するという文脈から、聞き手の答えが期待される。下降調の場合、文脈からは疑問文と解釈されるものの、文自体に疑問を表す要素はないといえる。1節の(2)「そっちは変わらない↘」という文もこれと同じもので、文脈的に疑問の意味が読み込まれた

ものである。

郡(2020: 161)によると、東京方言でも相手の意見を求めたり確認を求めるために事実や推測を提示するとき、「ソレガ オイヤジャナイ(〈自分はいやだが、あなたは〉それがおいやじゃない〈わけですかね〉)」のような文が無音調(本稿のいう下降調)になることがある。ここで示した下降調の文が文脈的に疑問文と解釈される例は、それと同類のものではないかと考えられる。

文脈からしか疑問の意味が読みとれない下降調の文は、典型的な疑問文とはいえ、場合によっては疑問文と見なさないほうがよいかもしれない。4節で述べたとおり、本稿では文脈を含めて疑問の意味を持つ文を疑問文と見なすことにしたが、今後、命令文など他のタイプの文も含めて福島県北部方言の文のタイプを整理する場合、これらの下降調の文は疑問文に含めないこともありうる。

なお、6.1節で文末が「だ」で終わる文は疑問文にならないと述べたが、疑問の意味が読み込まれる文脈でも、下降調なら使うことができる。次の(20)は6.1節の(11)の疑問文を下降調にしたものである。

(20) (応募した懸賞の結果を見た息子に母親が尋ねて) {当選↘/当選だ↘/当選だった↘}
 (11) で示した上昇調の「# 当選だ↗」はこの文脈にあわないが、下降調の「当選だ↘」は自然に使うことができる。下降調だと、あくまで文脈的に疑問の意味が読み込まれるだけで、文自体が疑問の意味を持つわけではないため、文末を「だ」で終えることができるのだといえる。一方、上昇調だと文自体が疑問の意味を持ち、平叙文でのみ使われる文末の「だ」の特性はそれに矛盾するため、「だ」で文を終えることができない。ここからも、文脈から疑問の意味が読み込まれるだけの下降調の文が典型的な疑問文でないということがいえる。

8. まとめ

本稿では、福島県北部方言において、平叙文と疑問文の違いが文末イントネーションの違いとどのように関わるかについて整理をおこなった。

5節で示したとおり、文末イントネーション以外に平叙文と疑問文を区別する手がかりがない場合、下降調はその文が平叙文であることを、上昇調はその文が疑問文であることを表す。2節で示した疑問文の文末イントネーションによる類型でいうと、福島県北部方言は東京方言と同じ「上昇調タイプ」、つまり、疑問文が基本的に上昇調になるタイプの方言だといえる。

しかし、上昇調が常に疑問の意味を表すわけではない。6節で示したように、文末イントネーション以外の要素から平叙文であることが自明な文で上昇調が使われることがある。その場合、下降調だと話し手がその場で認識したことをそのまま口にするような意味になるのに対し、上昇調だと話し手がすでに認識していたことを聞き手に知らせようとする態度が示される。

また、7節で示したように、文末イントネーション以外の要素から疑問文であることが自明な文が下降調になることもある。その場合、上昇調だと自分の知らないことを聞き手から教えてもらおうとする態度が示されるのに対し、下降調はそれ自体が疑問の意味を表すわけではなく、疑問詞や疑問の助詞「か」、あるいは文脈からその文が疑問文と見なされるにすぎない。

このような文末イントネーションのあらわれかたは、3節で示した基本的特徴にもとづくものといえる。つまり、下降調は、聞き手の持つ情報量を顧慮せず、話し手が認識したことをそのまま口にする場合にあらわれる文末イントネーションであり、特に疑問の意味を表すわけではない。ただし、その基本的特徴が疑問の意味と矛盾するわけでもないため、場合によっては疑問文が下降調になることもあるのだといえる。

一方の上昇調は、話し手と聞き手の間に情報量の差があることを見込む場合にあらわれるもので、平叙文であることが自明な場合でなければ、聞き手のほうが情報量が多いと見込む形で疑問の意味を表すことになる。平叙文であることが自明な場合に使われると、逆に話し手のほうが情報量が多いと見込む形で聞き手の知らないことを知らせる態度を表すことになる。

以上、本稿では、福島県北部方言を対象に、平叙文は下降調、疑問文は上昇調になるのが基本であることを確認したうえで、その基本から外れる例を示し、具体的なことを整理して記述した。

最後に、今後検討すべき課題について記す。本稿では終助詞の生起しない文を対象に記述をおこなったが、現実の日常会話では多くの文に終助詞が生起するのが自然である。また、本稿では聞き手との上下関係や親疎関係といった待遇面のことについても簡単にしかふれなかった。文末イントネーションのあらわれかたは終助詞や聞き手への待遇のありかたとも密接に関連していると考えられるため、今後の検討が必要である。

そして、本稿では聞き手の存在する対話場面を想定して記述をおこなったが、平叙文と疑問文は独話場面でもあらわれる。筆者の内省する限り、独話場面では、平叙文は必ず下降調になり、疑問文は上昇調になるのが基本である。3節で示した上昇調の基本的特徴は聞き手の存在を前提にしたものであるため、独話場面の疑問文が上昇調になることを説明するには、修正をする必要がある。現在のところ、聞き手ではなく話し手を取り巻く状況に対して話し手の持つ

情報量に不足があり、それを情報量の差と見なすことで独話場面でも上昇調が使われるのではないかと考えているが、今後の十分な検討が必要である。

また、平叙文、疑問文という文のタイプを定義づける基準について今後の検討が必要であることは4節で述べた。

これらのことを今後検討すべき課題として示しつつ、本稿を終えることとする。

付記

本稿はJSPS科研費21H04351、19K00622、および、国立国語研究所共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」による研究成果の一部である。

-
- 1 (1) のように話し手が自分の行動について話す文は意志文とも見なしうるが、聞き手に情報を知らせる文でもあるため、本稿では平叙文として位置づける。話し手の行動について話す文は平叙文、聞き手の行動について尋ねる文は疑問文ということになる。
 - 2 詳細な居住歴は次のとおり。0-5歳：福島県福島市、5-7歳：福島県保原町、7-12歳：福島県郡山市、12-14歳：福島県白河市、14-18歳：福島県福島市、18-30歳：大阪府豊中市、30-34歳：新潟県上越市、34-37歳：東京都品川区、37-41歳（現在）：東京都足立区。
 - 3 福島県北部を含む東北地方の諸方言では、「男」を [odogo] と発音するように、標準語の /t/、/k/ にあたる音がそれぞれ母音間で有声音の [d]、[g] などと発音される。この音声については、音韻的に /t/、/k/ と見なす論考も /d/、/g/ と見なす論考もある。本稿では、福島県北部方言を対象にした飯豊 (1974)、幡 (2004) にならい、ひとまずこの音声を音韻的には /t/、/k/ と見なし、表記にもそれを反映させた。つまり、例えば「男」を [odogo] と発音しても、それをかなで表記するときは「おどご」ではなく「おとこ」と書くことにした。
 - 4 五十嵐 (2021) は文末が上昇しないイントネーションのパターンを非上昇調と呼んでいる。木部も、木部 (2010) では文末が上昇しないパターンを下降調と呼んでいるが、木部 (2013, 2019) では下降調のほかに非上昇調という用語を用いている。筆者の理解では、これらの研究にいう下降調と非上昇調は、どちらも同じ文末イントネーションのパターンを指す概念で、明確な下降の見られるイントネーションのほか、いわゆる自然下降のような緩やかに下降するイントネーションも含む。明確な下降だけを表すわけではない点で非上昇調という用語のほうが適切かもしれず、木部 (2019) はそのことを説明したうえで主に非上昇調という用語を用いている。しかし、本稿では白岩 (2011a, 2014) を引き継ぐ形で、ひと

まず下降調という用語を用いている。今後、研究をさらに進めるなかで、下降調という用語の妥当性を検討する必要があるかもしれない。

- 5 ここでは、白岩（2011a）と白岩（2014）で若干文言が異なる箇所を調整して引用した。
- 6 「無音調」という用語からは上下動の少ない文末イントネーションが想起されそうだが、郡（2020: 161）によると、無音調は「場合によって、平らなこともあるし、かなり大きく下がることもある」とされる。いわゆる自然下降のような緩やかな下降と大きな下降の両方を含むものとして、本稿の「下降調」は郡（2015, 2020）の「無音調」に相当すると判断した。
- 7 ここで挙げる例文は白岩（2011a, 2014）と同じものだが、白岩（2011a, 2014）は述語部分以外を標準語訳にしていたのに対し、本稿では例文全体を福島方言のものとして示す。そのほか、文脈に追加の説明を加えるなどした。
- 8 文末が「だ」で終わる文に限らないが、福島県北部方言における問い返しの疑問文のイントネーションについて記述したものに白岩（2011b）がある。
- 9 この例のように目上や対等の相手ではなく、ごく親しい目下の相手に話す場合は下降調になることもありうるが、相手の存在を意識せず一人語りをはじめると、ぶっきらぼうな印象を与えることになる。
- 10 福島県北部方言では、通常の疑問文で主節に疑問詞と助詞「か」の両方が生起することはない。両方が生起した構造は、「いつ届くかわかんねえ《わからない》」のように、疑問節の補文として使われる。よって、文末が「か」で終わる文は、基本的に疑問詞疑問文ではなく真偽疑問文といえる。ただし、「いつ話すべか《いつ話そうか》」「どこさあっべか《どこにあるだろうか》」のように意志・推量の助詞「べ」が生起した疑問文であれば、疑問詞と「か」が主節で共起する。「べか」は独話の表現であり、必ず下降調になる（白岩2011a, 2014）。
- 11 「お父さん」は伝統方言にはない語であり、高年層話者は「父ちゃん（とうちゃん）」など別の語を使うが、筆者は「お父さん」を日常的に使用する。

例文の音素表記・グロス・標準語訳

【グロス略号】

1 : 1人称、ADNZ : 連体、COND : 仮定、COP : コピュラ、INFR : 推量、INTJ : 間投詞、LOC : 場所格、NMNL : 準体、NOM : 主格、NPST : 非過去、Q : 疑問、SFP : 終助詞、SG : 単数、TOP : 主題

- (1) uN |nomu \ / nomu / |
yes |drink.NPST \ / drink.NPST / |
'うん、飲む.'

(2) socci=wa {kawari nai \ / kawari nai /}
 your.side=TOP {change not.exist.NPST \ / change not.exist.NPST /}
 ‘そっちは変わらない?’

(6) A: soto ame=ka /
 outside rain=Q /
 ‘外は雨か?’
 B: uN {ame=da \ / # ame=da / / # ame=da / }
 yes {rain=COP.NPST \ / rain=COP.NPST / / rain=COP.NPST / }
 ‘うん、雨だ。’

(7) (8) のA「外、雨か/」およびB「うん、雨だ」の音素表記、グロス、標準語訳は(6)と同じで、文脈と文法性判断のみ異なる。(8)のB「俺がここにびしょ濡れなの見たらわかっぺで\」については以下のとおり。

(8) B: ore=ga kodani bisjonure=na=no mitara
 1SG=NOM so.much drenched=COP.ADNZ=NMNL look.COND
 wakup=pe=de \
 understand.NPST=INFR=SFP \
 ‘俺がこんなにびしょ濡れなの見たらわかるだろうが。’

(9) {nemui \ / # nemui /} daNdaN {neru \ / # neru /}
 {sleepy.NPST \ / sleepy.NPST /} soon {go.to.bed.NPST \ / go.to.bed.NPST /}
 ‘眠い。そろそろ寝る。’

(10) の音素表記、グロスは(9)と同じで、文脈と文法性判断のみ異なる。標準語訳は‘眠い?そろそろ寝る?’。

(11) {tooseN / / # tooseN=da / / tooseN=datta /}
 {winning / / winning=COP.NPST / / winning=COP.PST /}
 ‘当選?’

(12) {tooseN=da \ / # tooseN=da /}
 {winning=COP.NPST \ / winning=COP.NPST /}
 ‘当選だ。’

(13) seNsjuu kiNzjo=de omacuri
 last.week neighborhood=LOC festival
 {# atta=N=da \ / atta=N=da /} soN toki…
 {exist.PST=NMNL=COP.NPST \ / exist.PST=NMNL=COP.NPST /} that.ADNZ time

‘先週、近所でお祭りがあったんだ。そのとき…’

(14) の音素表記、グロス、標準語訳は (1) と同じ。

(15) docci {nomu \ / nomu /}
which {drink.NPST \ / drink.NPST /}

‘どっち飲む?’

(16) anoo docci {? nomu \ / nomu /}
INTJ which {drink.NPST \ / drink.NPST /}

‘あの一、どっち飲む?’

(17) {nemui=ka \ / nemui=ka /} daNdaN {nek=ka \ / nek=ka /}
{sleepy.NPST=Q \ / sleepy.NPST=Q /} soon {go.to.bed.NPST=Q \ / go.to.bed.NPST=Q /}

‘眠いか? そろそろ寝るか?’

(18) otoosaN {nemui \ / nemui /} daNdaN {neru \ / neru /}
dad {sleepy.NPST \ / sleepy.NPST /} soon {go.to.bed.NPST \ / go.to.bed.NPST /}

‘お父さん、眠い? そろそろ寝る?’

(19) の音素表記、グロス、標準語訳は (10) と同じで、文脈と文法性判断のみ異なる。

(20) の音素表記、グロス、標準語訳は (11) と同じで、文末イントネーションと文法性判断のみ異なる。

参考文献

五十嵐陽介 (2021) 「日本語諸方言のイントネーションと言語類型論」窪田晴夫・野田尚史・ブラシャント
バルデシ・松本曜編『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』pp.22-48、開拓社

飯豊毅一 (1974) 『言語使用の変遷 (1) —福島県北部地域の面接調査—』国立国語研究所

菅野宏 (1982) 「福島県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 4 北海道・東北地方の方言』pp.363-397、国書刊行会

木部暢子 (2010) 「イントネーションの地域差—質問文のイントネーション—」小林隆・篠崎晃一編『方言の発見—知られざる地域差を知る』pp.1-20、ひつじ書房

——— (2013) 『じゃって方言なおもしとか』岩波書店

——— (2019) 「疑問文の文末音調による系統内類型論の試み—イントネーション研究のために—」『国語と国文学』96(1)、pp.3-13、東京大学国語国文学会

郡史郎 (2015) 「日本語の文末イントネーションの種類と名称の再検討」『言語文化研究』41、pp.85-107、大阪大学大学院言語文化研究科

- (2020) 「話しことばの「末尾のイントネーション」」『日本語のイントネーション—しくみと音読・朗読への応用』 pp.135-186、大修館書店
- 白岩広行 (2009) 「福島方言の上昇下降調—文末イントネーションの意味記述—」『音声言語』 6、pp.157-173、近畿音声言語研究会
- (2011a) 「福島方言の文末イントネーション」『日本語文法』 11(1)、pp.88-104、日本語文法学会
- (2011b) 「福島方言の問い返し疑問—イントネーションによる区別—」『阪大社会言語学研究ノート』 9、pp.14-29、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
- (2014) 「イントネーションの意味記述—福島方言における試み—」『日本語学』 33(7)、pp.53-63、明治書院
- (2017) 「福島方言簡易文法書」『福島県伊達市方言談話資料別冊 福島方言の記述にむけて』 pp.26-56、上越教育大学大学院学校教育研究科白岩広行研究室 (科研報告書)
- (2018) 「福島方言の表記法を考える」『立正大学国語国文』 56、pp.1-13、立正大学国語国文学会
- 幡早夏 (2004) 「福島市方言における無声子音の有声化」『日本方言研究会第79回研究発表会発表原稿集』、pp.1-8

(2023年12月9日受理、2023年12月13日採択)